自己教育と異文化接触
―台湾古老の昔語りに関する考察を通して―

矢野　泉

The Significance of Self- Education and Trans cultural contacts
―Consideration on stories of the old age by a Taiwanese elder―

1．問題設定

自己教育は、学び方の基礎を学習した省察力のある者が自律的に既存の知識体系を批判的に脱構築し、新たな情報を包摂して、既存の知識から未知なる問いを導き出す営みである。学び方の基礎とは、文字の文化を背景とする識字者の学びだけを指すものではなく、声の文化に土台を置く非識字者の学びをも指す。

さらに、文字であれ声であれ、自ら情報を収集し解釈し他者に伝達する術を、学び方の基礎とする。筆者の自己教育観は、社会教育学者、末本誠が仮訳した「第２回自己教育研究国際会議」の「『自己教育に関する』草案」ほか[1)]を、参照して再解釈した（社会教育推進全国協議会編, 2005, pp. 219-220）。同草案によれば、「自己教育が動員する倫理は、実践の中で獲得されたものである」（同上, p. 220）。practice日常的な習慣、本稿の文脈で換言すれば、ローカルな習慣化された語りという意味での実践という次元ではなく、本稿では、ローカルな習慣を捉え返すグローバルな文脈での省察を含んだ実践として考える。そうであるならば、自己教育は反－日常的な習慣である異文化との接触を媒介することによって成立するといえよう。

さらに、異文化接触を基底とする実践は、野外におけるfieldwork（佐藤, 2006）とも考えられ、異文化間フィールドワークは、自己教育に寄与する。

筆者は、かつて日本が植民地として領有し第二次世界大戦の敗北によって領有権が放棄され、中華民国の台湾省として統合された歴史的経緯のある台湾の古老から現地を案内され、語りを聞いた。

本稿は、嘉南平野の人々に現在なお慕われつづける土木技術者、故八田與一をめぐる古老の異文化接触を通して、自己教育の意義を問う。

なお、筆者は、教育学で求められる学術研究の倫理にのっとり、必要に応じて、地名や実名に仮名を用い、匿名化を行い、語り手の個人情報の保護ならびに人権の尊守に配慮する。また、語り手は、インタビューにおいても、筆者との談話においても、外国の教育学研究者にとっては新鮮な知見を教示したが、そのいくつかについては、事情により公にしたくないという語り手の意向があり、筆者はそれに配慮した。さらに、語り手の特定を避けるため、語り手の職業や社会階層については言及しない。

2．「認識の暴力」への異議申し立て

本稿を論ずる筆者のスタンスについて説明する。筆者は、台湾を植民地統治した日本人の末裔である。植民者の末裔には、世代継承的な伝達により、植民者としてのまなざしが刷り込まれていることがある。本稿での語り手、古老は、日本のメディアが伝える台湾に関する記事は、ある立場から政治的に構築されたものであることを指摘し、メディアが語る異国の事実をありのまま受容しがちな筆者の見識を憐笑していた。

メディアだけではない。いくつかの文献調査の上で、限られた日程の調査研究のために訪台し、用意された情報を複眼的に検証することもないまま、情報収集の結果に満足し、台湾のなにがしかに関して、外からのまなざしで論じようとしていた筆者の植民者としてのまなざしに潜む「認識の暴力」について、古老は異議申し立てをした。

2009年７月11日、博物館における教育活動について取材するために訪台した。台湾人のホスピタリティ文化に疎い筆者からすれば、至れり尽くせりの歓迎を古老から受け、これ以上のもてなしを古老に望む思慮は筆者にはなかった。翌日の取材を終えて、あらかじめ計画を立てていなかったが、古老の地元に建てられた資料展示施設に、古老には相談なく急行し短い調査を行った。

予定にない調査としてかかる地方を訪問した経緯を含めて、日本へ帰着後、訪台時の歓迎に対して謝辞を国際電話で古老に述べた。電話の向こうで古老の地元において筆者が単独で調査に行ったことを残念がる古老に、「調べたいことはすべて調べられました。調査への同行をお願いしては古老に迷惑がかかります。外国人だからこそ明らかに出来ることもあります」という筆者の発言に対して、古老からから「もてなしがなにもできなかった」という意見があった。

古老は、台湾に代々生活基盤を有し、台湾の過去と現在を当事者としてつぶさに知る「わたしたち」を除け者同様に脇におき、外国人の方が状況に拘泥されないとして、「外国人だからこそ明らかに出来ることがある」と喝破するとはなにごとか、と筆者に異議申し立てを行ったのである。古老の反応は、地元の人のまなざしよりも外部から侵入した調査者のまなざしを優位とし、地元の知的な資産のなかから採取したいものだけ採取していく「植民者のまなざし」に対抗する憤り以外のなにものでもなかった。

古老からの意義申し立てに応え、筆者は、再度、植民者としてではなく、台湾人のもてなしの文化に再接触する客人として、古老邸に宿泊訪問することとし、くわえて、グローバル教育に関する教育戦略を学び記録に残し論文化しようと、インタビューを計画した。

植民者のまなざしに関して、筆者の脳裏をよぎったのは、Ｇ．Ｃ．スピヴァクが『サバルタンは語ることが出来るか』（スピヴァク, 2005, p. 30）で問うた一節である。

> 認識の暴力（epistemic violence）についての利用可能なもっとも明確な実例は、 植民地的主体（colonial subject）を他者として構成しようとする、遠く隔たったところで編成された、広範囲におよぶ、そして異種混交的な企図である。この企図はまた、当の他者が危うくも主体ー性を獲得するかにみえるときには、これとは非対称的に、その痕跡を抹消しようとする。

植民者のまなざしは「認識の暴力」といえよう。古老はたしかに、植民地統治されていた時代の台湾で、1931年に「日本国籍を有する台湾人」として生まれ、植民地統治が終わるまで「日本の台湾人」として育ち、台湾が中華民国の台湾省とされ、台湾と称されるようになってから、台湾人のアイデンティティの象徴であるho-lo語という家庭生活言語を継承し、「台湾の台湾人」として誇りをもって生活してきた。植民地統治から解放されても、筆者がそうであったように、「日本の日本人」は植民者としてのまなざしを先の世代から継承しており、旧植民地との非対称な関係を意識化することは容易ではない。意識化には教育による訓練が必要である。

３．メディアが語る台湾植民地統治の功罪

前述したように、メディアが語る異国の事実を易々と信頼するなというのは、古老からの教えでもあるが（古老との談話, 2009. 7. 16）、恰好の事例でもあるので、あえて古老の教えに背いて、メディアが伝える「台湾で広がる困惑」について取り上げる。

2009年９月16日の朝日新聞朝刊は「台湾で広がる困惑」という見出しで、NHKが日本の台湾統治を批判的に検証した番組が、台湾の人々に困惑や不満を喚起していることを伝えた。日本の植民地統治は台湾の人々にとって功罪両面があり、同じ人物が植民地統治時代のあることについて批判し、別のことについては懐かしむという複雑な感情があるという。以下、記事の一部を引用する。（朝日新聞, 2009. 9. 16）

日本人と一緒に学校に通った元医師の柯徳三さん（87）は番組で、教育における台湾人差別を非難する発言を紹介された。ところが本人は、「取材で日本統治をどう思うかと聞かれ、私は『功罪が五分五分』と話した。社会建設や教育の普及を評価したのに、功績の部分は完全にカットされた」と言う。柯さんは抗議文をNHKに送ったが、NHKは「発言の趣旨を十分に反映している」と反論、主張は平行線だ。台湾総督府直属の研究機関「国史館」の林満紅館長は、「日本は台湾をアジア進出の拠点とし、台湾人は二等国民として差別を受けた。しかし、日本が台湾経営に力を注ぎ、中国大陸やアジアの国々と比べ豊かで安定していたことも事実。一方的な肯定や否定は適切ではない」と話している。

上記の批判に対するNHKの反論は以下である。（朝日新聞, 同上）

「番組のホームページに、ご意見や疑問に対する説明を６月と７月に掲載しました。これに対して、事実に基づいた反論はいまだにありません。誤った情報をもとにして『内容が偏っている』『事実関係に誤りがある』『台湾の人たちへのインタビューを恣意的に編集している』などの批判があることは大変残念です」

筆者には植民者のまなざしがあったが、NHKが同様に、植民者のまなざしで取材したということをここで論じたいわけではない。NHKは報道機関としての良識をもって、取材にあたり、番組を構成したのだろう。それは、批判が寄せられた「JAPANデビュー」を担当した河野伸洋・NHK放送局エクゼマティヴプロデューサーの朝日新聞社への文書回答（朝日新聞, 同上）から推量できる。

しかしながら、台湾植民地統治の「功罪」ではなく「罪」の側面のみを描いたNHKに対して、日本語教育を受けた世代の親睦会「友愛グループ」や短歌愛好者で作る「台湾歌壇」が抗議や訂正要求をNHKに送ったことも、新聞報道（朝日新聞, 同上）によれば事実である。植民地時代に「日本の台湾人」であった台湾人当時者の団体が複数、抗議をしたという事実を重くみることなく、「事実に基づいた反論はいまだにありません」と断定するならば、スピヴァクが論じた「認識の暴力」を想起せざるを得ない。

もっとも、植民地統治の功罪両面どちらかに偏ることなく、八田與一の特集記事（朝日新聞, 2009. 7. 23）が組まれたこともある。記事では、1946年から地元民により慰霊祭が行われ、農業用水だけでなく、飲料水、工業用水としてダムの水が活用されているとする地元の水利会総幹事による語り、ダムで働いていた金沢出身の日本人からの情報などでダムでの慰霊祭に参加したことがきっかけで、金沢元市議が結成した「八田技師夫妻を慕い台湾と友好する会」代表の語りが示された。八田のふるさと、石川県では、1986年から小中学校の道徳の資料集のなかに八田の物語を入れ、2004年から「金沢ふるさと偉人館」八田のコーナーが設けられ、八田の物語は司馬遼太郎の小説や漫画家小林よしのりの作品にも取り上げられている。

八田研究に詳しい胎中千鶴の語りも示されているが、これは傑出している。それは、胎中の「八田の業績は植民地政策の一環であり、個人的資質とは切り離してとらえるべき」というコメントである。

４．烏山頭ダムのフィールドワーク

フィールドワークでは、亜熱帯の陽射しが厳しく、地元を案内してくれる古老夫妻の早足に必死についていった。まず、古老達台湾人の始祖である鄭成功の廟をはじめ、古老の案内で街歩きを行い、最後に、嘉南平野の人々の生活に欠かせない烏山頭ダムをみるために車で山深い場所に至った。

烏山頭ダムは広大な公園となっている。守衛所で入場料を支払い乗車したまま入っていく。整備されたゆるやかな車道をのぼっていくと、八田與一記念館、蒋介石の立像や休憩所、ホテルなどつぎづきと建造物が見えてくる。記念館の裏手は、ダムの放水路となっている。珊瑚のかたちをしたダム湖を見下ろす木立の近くに車を止め、古老夫妻と筆者は車を降りた。

ダム湖を眺望する木立の陰に、日本人名が刻まれた墓と、墓の手前に、低い平らな台座に片足をたてて膝に肱をおいて前髪をいじりながら思案する作業服姿の技師の銅製座像があった。古老による説明

(2009. 7. 19) を要約する。

これが八田技師と奥さんのお墓。八田技師はこのダムを造るために、台湾人と一緒になって、10年以上もこの烏山頭におってね、大変な苦労の末に、地形を利用して土の堤堰を1273メートルも積み上げて、給排水路が16000キロメートルにもなる万里の長城に匹敵する東洋一のダムを造ったのよ。このおかげで、水がなくて枯れてばかりいた嘉南平野が潤って、作物がたくさんできるようになったのね。この辺の農民はみんなそのおかげで貧困ではなくなったから、八田技師はお墓や銅像が建つほど農民に感謝されてね。ここのダム工事がおわってから、台北に戻って、今度は、フィリピンへ派遣されることになって。フィリピンに着く前に船は沈められて八田技師は亡くなるんです。八田技師が亡くなってから、奥さんもダムの放水路に身を投げてね。いまでも八田技師の命日５月８日には、農民が集まって、ここでお祀りをやるのよ。人柄も、座像を見てもわかるように、全然偉そうじゃないしね、農民はみんな八田技師を尊敬しているのよ。このダムは珊瑚のようなかたちをしているでしょう。だから、『珊瑚潭』って呼ばれているんですよ。

筆者は、古老の教えに聴き入るばかりであったが、ハッタギシが八田技師であり、1930年当時にあって、東洋一のダムと水路を建造したこと、台湾統治下の日本国民であった台湾人を差別せず、異文化間同胞として台湾人との開拓に奇想天外な発想をもって尽力し、学校や娯楽施設などを擁する集落を作って共同生活をし、地元に多大な貢献をしたことで、地元の農民から愛されているという古老の教えが、筆者にとってなにを意味するのかを理解するには、インタビューでの失敗や失敗を通じて得られた知見を待つこととなる。

５．インタビューの失敗と失敗から示された知見

インタビューの設問はあらかじめ伝えてあったが、インタビューを開始する時に、古老は、「あなたの聞きたいことについては、子ども達のしたいように応援するだけ。わたしに教育戦略というものはない。以上」と語り[2)]、同席した夫人が驚くほどに、緊迫した気まずい場となった。場の空気を変えたのは筆者であった。

古老に、筆者の設問については聞かないかわり、烏山頭ダムを造り、地元の農民からいまでも慕われている八田技師について語ってもらうことにしたのである。古老は、筆者が知りたかったこととは違うのではないかと訊いたが、筆者は八田技師のストーリーからの教示はあると判断した。

そこで、録音機材をセットし、インタビューをはじめたが、古老の仕事が合間に途切れなく入り、録音ボタンを何度も押すうちに、最初に採取したデータにつぎのデータが上書きされ、録音機に残されたインタビュー記録のうち採取したデータが幾分失われた。

筆者は痛恨の想いで、古老の語りを聞き続け、上書きの状態で記録を採取した。

しかし、インタビューを含むこの異文化間フィールドワークの成果を先取りして述べると、インタビューには失敗したが、想定外の知見が得られた。というのは、地元の人しかしらないストーリーとして八田技師について語り／聞くという前提が古老と筆者の間にできあがっていたこと、それにもかかわらず、実際には、八田技師のストーリーは、台湾では中学校の教科書で誰もが学ぶ「あたりまえ」の説話であって、そのままでは記録に取るほど「めずらしい」語りではないということが、筆者による事後の資料調査（朝日新聞, 2009. 7. 2[3)] により判明したからである。これについて確認するため、筆者は事後国際電話で古老に問い合わせた。そうすると、古老は、誰でも知っている話を筆者に語ったのだと愉快そうであった。

調べてみると、「嘉南平野を大穀倉地帯に変えた」という紀行文として、「台湾で語り継がれる八田與一物語」が紹介されているガイドブック（萩野・邸, 2008, pp. 208-217）や、『植民地台湾を語るということ-八田與一の「物語」を読み解く』（胎中, 2007）、『日台の架け橋・百年ダムを造った男』（斎藤, 2009）など

が刊行されていることもわかった。

横浜市内８区の市立中学校で平成22年度の採択が決まった、『新編 新しい歴史教科書』（自由社）でも、八田與一は「台湾のために命がけで働いた」（同上）日本人として、墓と銅像の写真入りで紹介され、称賛されている。もっとも、当時の台湾は日本に統合されていたのだから、上記の教科書の解説にあるように「台湾のために」というより、「日本のために」台湾という日本の地方で働いたという表現の方が適切である。八田與一は優秀な土木技術者であり工事の総監督者であったのだから、日本の水利事業であるダム完成のために不要な異文化間の摩擦を起こさなかったのは当然であり、同じ目的のために働く同志として、台湾人、日本人の別なく遇したということも、驚くことではない。八田技師がそれほどまでに台湾人に慕われていたということならば、むしろほかの日本人がどのように台湾人に接していたかが想像できる。以下の古老とのインタビューにおける談話からこのことが窺われる。

古老「あの頃、日本が台湾を占領していたんだから、台湾は八田技師にとっても自分の国だった。あの人は日本の内地から台湾を治めに来た技術者なんですよ」

筆者「それが八田與一ですね」

古老「そう。あの人は1920年代から、はじめたわけよ。仕事を。烏山頭という裏山でね。むかし、あそこに、溝がたくさんあったの。そして、（ぴぴっぴゅー）」

（ぴぴっぴゅー）という音は、仕事場から古老が呼び戻される合図の音声である。インタビューは幾度も中断され再開された。

古老「もちろん、台北から家族を連れてきた人もおるし、残してきた人もおるわけよ。家族を連れてきた人たちのために道場も開いたし、映画館も作ったし、博打をやらしたわけよ。麻雀を教えたわけ。なんにもないところだったから、博打もゆるして、そのために、わたしたちの住む地元はにぎやかな街になったわけよ。ダムを造る10年間に発展したわけよ」

筆者「そうですか」

古老「ダムにはね、給水溝と排水溝とがあるのよ」

古老はダムの造りについて詳細な説明を筆者に行った。

古老「ダムの話でいいの？こんな話が教育に関係あるの？」

筆者「いいんです。古老はわたしをこうしてeducateしているわけだから」

さらに、古老は重要な指摘をした。

古老「いま考えてみれば、彼氏（八田技師）ひとりの力でダムを造った訳ではないでしょう？」

筆者「はい？」

古老「たくさんの人の力でダムが出来て、均等に水を配れるようになったのよ」

八田與一だけの力で、巨大な水利事業はなしえなかったという古老の洞察がここにある。

もちろん、八田をはじめ日本人技師達の功績は大きかったが、日本人技師の構想をかたちにしていったのは、台湾人労働者たちであり、ダム建設のために造られた烏山頭の街に移り住んだ日本人技師や台湾人労働者を支えた家族も含まれる。

筆者「そうですね。たくさんの人の力で。ところで、地図でダムの大きさを確認したいんですが」

古老「地図ならここにあります。２つの県にまたがっていますよ」

筆者「大きいんですねぇ」

古老「これが珊瑚潭（珊瑚のかたちをした湖）。もしこのダムが出来てなかったら、15万ヘクタールの

嘉南平野で米が採れなかったわけよ。嘉南平野に住んでいる農民の生活はもっと苦しかったはずです。だから、ここの農民はいまになってとても感謝していますね。むかしはいろいろ（植民地統治者である日本人に）いじめられたし、差別待遇があったかもしれないけどね。いまは毎年５月８日（八田技師の命日）になったら、毎年、お参りするのよ」

古老は「ここの農民はいまになってとても感謝している」と語った。「いまになって」という古老の語りに、筆者は着目したい。3)というのは、胎中のように、日本の国益のための前代未聞の巨大水利事業を成し遂げ、八田の個人的な魅力や技師としての技術力は別の次元に属するという解釈がほかにもあってもよいにもかかわらず、植民地統治の功罪に触れずに、技師としての八田與一というより、日本人の八田與一として台湾人の恩人と捉えられ、このことがとくに強調されて語られ描かれる傾向にあるからである。古老にも、八田の個人的な魅力と技術力に関する尊敬の念は確かなものとしてある。

このように、烏山頭ダムをめぐって「台湾を愛した日本人」として八田與一の個人的な魅力ばかりが称賛されるが（古川, 平成４年、「日本人の歴史教科書」編集委員会, 平成21年)、古老は、八田の設計をダムのかたちにしていった多くの台湾人、日本人技術者、労働者ひいてはその家族の労苦を筆者に教えることを忘れなかった。

さらに、古老は、インタビューにおいて、赤堀技師の娘に言及した。赤堀氏は八田技師が烏山頭を去ったあと３代目の所長を継いだ人物である。赤堀技師の娘は、後年、八田技師の長男、八田晃夫の妻となった。八田晃夫は妻と慰霊祭に訪れていた。そのときに、古老は晃夫と赤堀技師の娘に出会ったのだろう。こうした丹念な異文化接触の積み重ねと、地元で習慣化された語りを問い返すことにより、「いま考えてみれば彼氏（八田技師）ひとりの力でダムを造ったわけではないでしょう？」という見識が得られるのである。古老から借りた古老の愛読書には、八田晃夫の署名が記されていた。

６．結論

古老が地元の大人達から伝え聞いた以上に、成人してからの自己教育により、古老は八田與一のストーリーに精通していった。日本の植民地時代の台湾に生まれ育った古老が、植民地統治時代の台湾を直接経験していない日本人学校の教師を務めた日本人によって書かれた八田文献に学んだことが、文献への書き込みにより、跡づけられたのである。ダム完成後に生まれ、完成により烏頭山を去った八田與一とは面識のない古老が、八田與一について臨場感をもって語ることが出来るのは、地元で継承されてきた語りの反一日常的な省察によるものだろう。

古老は、家庭生活言語であるho-lo語とかつて国語とされた日本語、現在台湾で国語として定められている中国語（北京語）を使いこなす。日本の植民地統治の功罪両面について、日本語の文献の熟読、日本人との交流といった異文化接触を介して、台湾に伝承されていた物語の知を深化させて、筆者に教示した。

八田與一を日本の植民地統治の功罪の一面に過ぎない「功」の側面から英雄視するのは早計である。八田與一の物語は、嘉南平野を郷土とする台湾人の語りによってまず鍛えられ、台湾と日本、異文化間で物語の断片が組み合わされて、教えられる。その教え方には語り手や書き手の意図が浮き彫りにされる。

わたしたちはねぇ、たしかに日本人からは随分いじめられたけど、いじめられただけじゃないのよ。差別されたことだけじゃなくて、いいこともあったし。わたしは、差別には遭ったことはないのよ。わたしの父親は一目置かれていたからね。地元では尊敬されていたし。小学校も日本人と同じ学校だったしね。差別されたと感じたことは一度もなかった、それがわたしの誇りよ。（インタビューにおける談話から）

ここで注意しておきたいのは、植民者である「日本人から」統治の対象とされた「台湾人」が「随分いじめられた」という植民者の「罪」を告発している語り「いいこともあった」という「功」に関する語り、

また、古老の「父親が一目置かれて」「地元で尊敬されていた」ために、古老自身は、「差別を感じたことは一度もなかった」という例外的に恵まれた環境を与えたくれた父親を持つことができたことについての「誇り」を表出している語りである。

古老は、父親や古老が育まれた地元、嘉南平野について誇りをもって伝承するために、植民地統治の功罪にも言及するのである。

台湾だけでなく日本でも中学校の教科書の題材とされ、これからますます八田與一の物語は、古老が愉快そうに[4]明かした「誰もが知っている物語」になっていくだろう。しかし、物語の構成や語られ方は多様であることに留意したい。本稿を総括するならば、教えられるままに物語を理解するのではなく、習慣化された文脈における語りを反ー日常的に省察すること、そのために異文化との接触を媒介させること、それがわれわれに求められる自己教育であるということがいえる。

（参考文献・資料）

朝日新聞、朝刊、2009年７月23日「台湾で有名、八田与一って？ダム建設、友好の架け橋」
朝日新聞、朝刊、2009年９月16日「Media Times 台湾で広がる困惑ー日本の植民地統治を批判　NHK番組」
萩野純一、邸景一ほか『台南ー台湾史のルーツを訪ねる』旅名人ブックス、日経BP企画、2008年
古川勝三『台湾を愛した日本人ー八田與一の生涯』、第３版、青葉図書、平成４年
古老に対するフォーマル・インタビュー、2009年７月20日、古老邸にて
「日本人の歴史教科書」編集委員会、『日本人の歴史教科書』、自由社、2009年
齋藤充功『日台の架け橋・百年ダムを造った男』時事通信出版局、2009年
佐藤郁哉『フィールドワークー書を持って街へでよう』増補改訂版、新曜社、2006年
末本誠仮訳「『自己教育に関する宣言』草案」、社会教育推進全国協議会編、『社会教育・生涯学習ハンドブック』第７版、エイデル研究所、2005年
Spivak,G.C. ,(”Can the Subaltern Speak? In Marxism and the interpretation of culture”,University of Illinois Press,1988) 上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房、第7刷、2005年
胎中千鶴『植民地台湾を語るということー八田與一の「物語」を読み解く』風響社、2007年

（注）

1) 自己教育については、ほかに、これまでの『日本社会教育学会紀要』に収録された論文および日本社会教育学会編『講座現代社会教育の理論』Ⅰ～Ⅲ（東洋館出版社、2004年）を参照した。
2) 古老は、教育戦略という政治的含意のある設問を好まなかった。政治的な事柄と距離を置く古老の意思に配慮し、設問そのものを変更した。
3) ダム建設のために創設された「組合」、「水利会」や地元の農民は、「いまになって」ではなく、八田技師が嘉南平野で働いていた時から、恩人として感謝しているとされており、古老の語りはそうした既存の語りを踏まえたものである。
4) 古老は暗い時代の悲観的な状況を生き抜いてきただけあって、慎重にして賢く、朗々と生きる技法を持っている。筆者の恩師のひとりである社会教育学者、山田正行氏が台湾系アメリカ人研究者、張灝氏から学び、筆者に教えてくれた「慎重な楽観」に通ずるスタイルである。山田氏によれば、「慎重な楽観」は原文では「審慎的楽観」で、『張灝自選集』(上海教育出版社、2002年)に書かれている。山田氏は、2009年９月８日、ワシントン郊外の張灝氏の自宅で、直接説明を受けている。（山田正行、2009. 9. 29）

（謝辞）
古老の意思により、実名を記すわけにはいかないが、貴重な知見を教示していただいた古老には、記して厚く感謝する。また、古老との出会いのきっかけを与えてくれたＡさんにも深謝する。さらに、浅学非才の筆者を導き助言し励ましてくださる恩師のひとり、山田正行氏にも謝意を伝えたい。